反省をモデル化する:「感覚的確信」の中の超越論的論証

Modelling Reflection: Transcendental Arguments in “Sense-Certainty”

木本周平 (Shuhei KIMOTO)
東京都立大学 (Tokyo Metoropolitan University)

哲学は論証の学であるとされることがある。ここで言う論証とは、特定の前提や我々が現に認めている諸事実から、何らかの結論が必然的に（もしくは相当程度の確からしさを伴って）帰結することを保証する議論構造のことを意味するものとしておこう。哲学を論証の学とすることはある程度の一般性をもつが、哲学が必ずしも論証というスタイルをもつわけではないという例としてウィトゲンシュタインの名前を挙げることはできるであろう。そして意外に思われるかもしれないが、実はヘーゲルにおいても論証形式の不在を指摘することができる。こうしたスタイル上の特徴は哲学者としての彼らの好みの問題として片付けられる傾向があるかもしれないが、本発表で私が試みるのは、ある種の哲学的な問題が本質的に必要とするものとしてこのようなスタイルを位置づけることである。

哲学には批判がつきものである。ヘーゲルとウィトゲンシュタインのどちらの哲学も、カントやフレーゲといった前の世代の哲学者に対する批判的考察を本質的に経由しているのは事実である。哲学的な批判は一般的には論駁という論証スタイルとして現れることがあるが、二人の哲学者は上の意味での論証形式を採用しないことに付随して、彼らには論駁という批判的活動形態が欠如していることも指摘されうる。本発表で私はこの点にまず着目する。一方で後期ウィトゲンシュタインを特徴づけるのは治療としての哲学という考えである。ウィトゲンシュタインにとって哲学的な問題の解決はある考えを論駁しそれが誤っていることを論証的に示すことによってもたらされるわけではない。哲学の問題とされるものはそもそもが問題ではなかったということが示されるが、それを与えるのはウィトゲンシュタインの自己対話的論述に特徴的な反省構造である。他方で、これと同じ事情がヘーゲルにおいても指摘されうる。『精神現象学』において現れる弁証法的構造は、さまざまなレベルの知識主体が論駁を受けることで自らの主張を適宜修正していく合理的なステップではなく、自らが自明視する前提が部分的なものでしかないということに自ずと気付かされる点に一つの特徴がある（同じ反省構造は実は『大論理学』においても部分的に採用されている）。

両者のスタイル上の類似性を考察の基礎とすることで、『精神現象学』を特徴づける反省構造のもつ哲学的意義に新たな光を当てようというのが本発表で私が試みることである。一般にこの著作は、最もプリミティブな意識が絶対的な知識へと向かう壮大な教養形成の物語とされることがあるが、こうした紹介が一般に与えるのは、主体が徐々に知識を獲得していく発展的成長というイメージであろう（あるいは、経験主義的な知識拡張と言ってもよいかもしれない）。こうした一般的なイメージに対して、かつてチャールズ・テイラーは『精神現象学』の冒頭を飾る「感覚的確信」がある種の超越論的論証となっていると論じたことがある。超越論的論証とは、ある活動への参与という自明の事実からその活動を支える自明の前提を明らかにし、それによって一連のふるまいがまさに当該の活動としての特徴付を得ることを保証するものであり、それは後退論証の形をとるとされる。私は「感覚的確信」が超越論的であるという点でテイラーの主張は正しいと考えるが、これは上記の一般的イメージとは全く異なる『精神現象学』の理解を与えるはずである。

本発表で私は「感覚的確信」に固有の反省モデル（いわゆる意識の二重性）が含む二つの側面とそれらの関係を指摘することで、こうしたスタイルが何を意図したものであるのかを示す。それは（1）

真理の唯一の基礎を感覚的インプットに求めようとする経験主義的な想定が自ずと瓦解する過程を提示するという側面であり、また、(2) その過程において感覚的情報の受容それ自体がより大きな前提に支えられており、またそれはより大きな前提に支えられた認識活動（この文脈では知覚）の一部であることの明確化にもなっているという側面である。この二つの側面は単独では十分な意味を持たない。というのもテイラーが言う通り「感覚的確信」が超越論的であるとしても（(2) の側面)、我々が自らの活動を支える前提をどのようにして特定できるのかはほとんど明らかではないからである。私の考えでは、なぜ (1) が必要となるのかという問い（これは『精神現象学』の表現で言えば、「なぜ意識にとって「絶望」の経験が必要となるのか」と言い換えることができる）に答えることがこの点についての示唆を与えるはずである。ヘーゲルの反省モデルはある特定の条件下での主体の認識活動のシミュレーションとなっていると解釈可能である。例えば、「感覚的確信」は（本来であれば）認識を支えるであろう諸前提を欠く架空の認識主体がみせるふるまいや、そこで不可避的に生じる挫折の過程を我々がただ見ているだけだとされるが、これはまさに思考のシミュレーションを展開してみせていると言ってよいであろう。そしてこのシュミレーション下で、想定上の主体が諸前提の存在を自覚するようになる場面は、それと同時に我々自身が暗黙にもっている前提の明確化の契機にもなっている。というのも、我々自身もまた認識を支える適切な前提を欠くとすれば、「感覚的確信」の主体と同じように振る舞わざるを得ないのであり、その点で、「感覚的確信」は同時に自らの前提を明らかにする思考のシミュレーションでもあるからである。したがって、シミュレーションとして理解すれば、テイラーの意味での超越論的論証を上記二つの側面を通じて展開しているとも解釈可能であろう。

ヘーゲルの議論をシミュレーション的実践として特徴づけることはやや大胆な印象を与えるかもしれないが、おそらくこのような理解がヘーゲル哲学に固有の「概念的枠組み自体の運動」という根本的アイディアがなぜ可能であるのかを捉えるために必要であろう。そしてこのアイディアはヘーゲルの議論を論証として合理的に再構成する（たとえば「感覚的確信」をヘーゲルの直示的認識論として再構成するなど）ことによっては捉えることができないのである。

Taylor, Charles. 1972. “The Opening Arguments of the Phenomenology.” In *Hegel: A Collection of Critical Essays*, edited by Alasdair MacIntyre, 151-86. Notre Dame: University of Notre Dame Press.

Taylor, Charles. 1995. “The Validity of Transcendental Argument.” In *Philosophical Arguments*, 20-33. Cambridge, MA: Harvard University Press.